

第2回 近畿圏広域地方計画学識者会議(その2) 議事要旨

1．開催日時：平成 19 年 5 月 29 日（水） 13：30～15：30

2．場 所：大阪合同庁舎 1 号館第 1 別館 2 F 大会議室

3．出席者：別紙参照

4．議事要旨

- ・ 前回先生方に意見をいただき、その議論を踏まえて整理したものが本日の資料である。6 月 15 日の第 2 回検討会議で大きな方向を議論いただくためのたたき台に関して本日意見をいただきたい。関係する機関が出席しているので質問等もして欲しい。資料は関係者内で合意できておらず、不足する部分もあるので忌憚のない意見をいただきたい。5 月 23 日に第 2 回学識者会議（その 1）を開催しており、その意見も踏まえて資料を修正している。では、これまでの議論を粗方まとめた資料 1 について意見をいただきたい。（近畿地方整備局）
- ・ 私は関西生まれ、関西育ちで、近畿圏を愛しているということでいろいろ申し上げたい。
- ・ 資料 1 でいろいろ戦略がなっているが、例えば「関西」を「九州」に置き換えたらどうなるか。特に戦略 5 などは同じようなことが言え、関西ならではのものがほとんどないのではないかと。では関西の唯一性は何かということ、関東圏に対抗できる唯一の地域であることと思う。広域地方計画は全国計画の一部なので日本のことを考えて書くべきである。東京一極集中は関西がだらしなからであり、それに対する責任を感じていないのが問題ある。最近の関西は気概が欠けている。関西はもともと二眼レフの一眼であったと思うが、そのうち関西は 2 番目どころかその他大勢になってしまう。
- ・ 関東の都県市はまとまりが強く、ディーゼル車の環境規制など、まとまった取組をしている。自動車交通の環境問題といえば関西が発祥と思うが、関西の地方公共団体でまとまって議論するという場がない。関西では関西全体でまとまって議論するという風潮がなく、悪く言えば足の引っ張り合いをしている状態である。道州レベルで連携を目指していくべきなのに、そういった都市同士の連携構造の基礎ができていない。このままでは東京にモノが集中してしまう。それに対抗し、分担できる唯一の地域が関西という気概を持って欲しい。日本という視点を近畿こそは持っていただきたい。日本の中での唯一性を持った計画にして欲しい。そういう意味では、10 の戦略では近畿ならではというものを並べるべきである。（大石先生）
- ・ 前回のヒアリングの意見が反映されていないことを申し上げたい。

- ・ 関西は日本誕生の場所であり、文化・伝統を継承し、経済活動につなげることができる。「日本誕生」は他のどこにも真似できない重要なキーワードである。
- ・ 経済界の中で文化・伝統では飯が食えないという意見がある。関西の経済界の人は関西のことをよく分かっていない場合がある。経済が大事なのであれば経済活動を日本誕生ということから考えていくべきで、本社機能が東京に集中していく中、何が関西かということを問いたいと思う。
- ・ 戦略1や戦略2は、そういった視点で修正すべきと思う。(千田先生)
- ・ 目指す姿に、日本の心(アイデンティティ)やもうひとつの中心核という言葉があるが、関西がそれを背負って立つという意識が欠けていると思う。先日カンヌグランプリを受賞した映画監督の河瀬さんは奈良出身で、奈良の茶畑を映像に出すなど奈良にこだわった作品を作られたが、インタビューの中で、「今の日本人が大切にしたいものを世界に向けて発信したい」と答えていた。近代化の流れで日本人が忘れかけている大切なものを、気概を持って、目指す姿に書いて欲しい。
- ・ 戦略については、主語・述語の関係など文章が分かりにくい部分があり整理が必要である。
- ・ 関西は独自の文化を大切にできており、文化的資本を大切にしていける国づくりを関西で大事にしていくべき。
- ・ 大阪の歴史を勉強すると、大阪へ都を移すことへの反対理由は、日本の中心に位置していない、道が狭く港が小さいという理由以外に、都にならなくても衰退しない(江戸は衰退する)ということが挙がっていたらしい。関西には元々持っているエネルギー、独自の文化、アイデンティティがある。東京に対抗しなくてもやっていけ、逆にリードするという気概が持てる場所だと思う。現在は、その実態が伴っていないのが残念であるが、そのような意識を持って検討して欲しい。(音田先生)
- ・ 10の戦略は今までいただいた意見を取りあえずまとめたもので、そのまま計画になるとは限らないし、抜けたもの、統合すべきものがある。目指す姿も抽象的になっており、東京に対抗すべきものをつくるのか。東京とは違う独自のものを作るのかを議論する必要がある。(近畿地方整備局)
- ・ 産業立地の面で関西をみると、関西の古い産業がロックインされ、ダイナミズムが失われていると言える。目指すものは、新しい情報・知識・アイデアなどが産み出されるデザインをどう作り出すかである。
- ・ 戦略4で、大阪湾ベイエリアに高付加価値型の物流拠点が立地していることは興味深いが、大阪湾ベイエリアを物流拠点とだけ位置づけるのはもったいない気がする。例えば、尼崎の森など環境を考慮した実験空間も形成されており、規制緩和のもと新しいものを産み出す空間と位置付けた方が良い。

- ・ ここ 10 年ほどで台頭が目覚しい新しい活動主体、第 3 の領域として、市民、NPO、コミュニティビジネス、社会起業などがあり、これらの主体をどう根付かせるかがポイントである。阪神淡路大震災後、関西はそういった活動の先進であると言える。特に EC で注目されているソーシャル・インクルージョン（社会的包括）などの視点を採り上げて欲しい。このような地域ベースの活動が安全で安心な地域を作ることができる。グローバリゼーションとローカライゼーションは極めて重要な両輪であり、相乗的な力を発揮する。グローバルな表現は多いが、地域の豊かさ、安全・安心のための視点などを盛り込む必要がある。（加藤先生）
- ・ (仮称)関西元気プランという表現も少し考えた方が良い。
- ・ 関西の言葉や地名を具体的に入れた方が良い。関西には、人の生業で共生してきた自然である文化的自然があり、農業やコウノトリの話なども挙がってきている。文化、人の生業、時間によりできた自然であり発信力がある。ローカルだがグローバルでもあるということで具体的に書いた方が良い。文化的自然について、農林水産の営み自体は衰退しているかもしれないが、都市に近いところにあり、文化的な風景を形作っていることは特徴だと思う。
- ・ 関西では、都市それぞれが個性を持って自立しながら連携していく仕組みを作っていくことが大きな課題だと思う。関西がきちんと情報を発信しないかぎり、意味のない制度が作られてしまう。価値観の発信力がないことは問題で、発信力が落ちているということの自覚をもって発信して欲しい。
- ・ 関西は、高齢化問題やニュータウンの問題など、良いも悪いも変化の先端を行っている。関西は先導的に取り組んでいく必要があるが、それぞれの地域が自立しているので、一極集中とは違う難しさ、おもしろさがある。
- ・ 関西は都市だけでなく、滋賀、奈良、和歌山、太平洋側、日本海側など多様性を持っている。どのようにその多様性を使って力を発揮していくかが重要である。（小浦先生）
- ・ 関西の発信力が落ちていることは事実であり、(仮称)関西元気プランが発信力の源になってくれれば良いと思う。
- ・ 10 の戦略に関西らしさがないのとは思うが、どうすれば関西らしくなるのかを考えるとなかなか難しい。目指す姿で、日本の中のもうひとつの中心核とあるが、個人的な感覚では、だからどうという気持ちになる。我々が見ているのは世界で、日本の中だけで勝負しても勝てない。世界で認めてもらえればそれでいいという感覚を持っている人は結構多いと思う。
- ・ 目指す姿を整理する上で、グローバリゼーションの中で関西はどういう状況に置かれ、どの方向に向いているかという現状認識が必要。中国の貿易量が増えており、中国が加工貿易の中心で部品が世界中から集まってきた。広大な土地が必要であるため、この流れを変えることはできない。その中で日本、関西はどういうポジションでいるべきかを考えると、したたかなビジ

ネスモデルが必要と思う（例えば関空 24 時間化でどうするのか）。

- ・ 人の価値観が大きく変わってきていて、2010 年が日本の転機で新しい価値観が日本のマジョリティになるとも言われている。その中で目指す姿がどうあるべきかという大所高所の議論が必要である。既にいろいろな報告書があるので、エビデンスをきちんとつけて議論すべきである。
- ・ 関西の過疎地域は東北の過疎地域と違い、平均年齢が下がっておりポスト高齢化社会になっている。日本が 10 年、20 年後に訪れる社会がすでに関西には訪れている。そこを戦略として取り込む絶好の機会が与えられ先取りしているということを発信していくべきである。
- ・ 関西は何が良く、個性かと言うと、究極的には人間だと思う。アントレプレナーシップ、起業家精神が本来あり、それが大きなコアになると思う。（小林先生）

- ・ アジアの中での関西の位置づけが、もう少し分かるようにして欲しい。
- ・ 関西が日本の国土、国に対して果たすべき役割が本当に必要なのか。もしくはそれは放っておいて、グローバル化の中でどう生きるのかを考えていき結果として二極ができている（二極は目的論ではなく結果論）という考え方もある。
- ・ 関西の独自性について、古来から続く伝統、文化、スピリットが、関西に最も多く残されて今にも続いていると言える。それをどう活かし、どう加工して情報や産業として生まれ変えさせグローバルな戦略として位置付けるのか、といった視点で考えていくべきである。（仮称）関西元気プランという名称は良くなく、創生プランといった考え方で検討して欲しい。
- ・ 戦略について、関西が新しく生まれ変わるようなグローバルな戦略と、関西が最低限生きながらえていくための戦略といった両方のフェーズが必要である。
- ・ 10 の戦略は全て必要ではあるが、だから 10 の戦略によって関西はこうしていったらいいというフィロソフィが欠けている気がする。
- ・ 首都圏や東海圏と違うのは、都市圏と中山間地域が非常に近いということ。このように都市と山地が入り交じっている地理的な特徴をどう活かすかを踏まえるべきである。
- ・ 戦略 1 について、「本物」がどこまで議論されたのかと思う。このままでは「本物」がどういう意味なのか分からない。
- ・ 戦略 2 について、テーマパークという表現も今さらないのではと思う。
- ・ いろいろな羅列はあるが、日本全体、グローバルな視点で見たフィロソフィがない気がする。（黒田先生）

- ・ （仮称）関西元気プランはこの言葉に決まった訳ではない。近畿圏広域地方計画と言っても一般の人には分からないのでそれに代わる愛称みたいなもので、とりあえずの仮称である。（近畿地方整備局）

- ・ 仮称にしても「元気」は良くないと思う。(黒田先生)
- ・ 関西は「日本誕生」の地ということを行ったが、日本が生まれ歴史・伝統が続いているという意味以外に、東京は日本沈没なので関西は日本誕生という裏の意味もある。関西は頑張ればこれからの日本をリードするくらいの力をつけられる。これは伝統の力などに支えられたものである。東京は情報は多いが文化は爛熟しており、これは退廃の気配と言える。このことは携帯電話と同じで、様々な機能が備えられた結果、本来の機能が失われている。東京の文化が退廃していくと関西が浮上するかもしれない。
- ・ 関西がグローバル化の中でユニークさを持ちえている面は、奈良から京都へと進んでいった文化の作り方である。細やかで繊細な文化、クールな文化と言われているがそれに近い感覚で、細やかなおもてなしや、生活しやすい行き届いたまちづくりなどが挙げられる。何かがあれば良いという発想でなく、人間生活とうまく合わせた細やかさ、ということを発信できないかと思う。京都友禅、茶道、華道などの文化を生んだシンプルにして精神に訴える繊細さがこれからの国土づくりに必要と思う。これまでは粗っぽい国土づくりであった。
- ・ 細やかさは中国などにも対抗できる。広大な中国では細やかな文化は無理で、狭い日本列島ならではの細やかさが強みで、関西はその中心になれる。細やかさは、教育、ものづくり、地域計画、住宅形成、環境問題などさまざまな分野に適用でき、関西は、伝統・文化に乗った国土形成計画が作れると思う。
- ・ 大阪、京都の関係が良くないと聞く。いずれにもエゴがあるのだろう。京都大学の新キャンパスが学研都市でなく京都市内であったことも京都市のエゴであると思う。もう少し、関西各都市内での役割分担が必要と思う。
- ・ キトラ古墳を見ると、あの細やかな筆づかいは、まさに日本の文化であると思う。あのような細やかさを、生活、産業に適用できれば良く、関西はそれが一番やりやすい地域であると思う。(千田先生)
- ・ きめ細やかな文化については、戦略1で言おうとしているが表現が稚拙なのかもしれない。1番目に持ってきているということで最も重要という考えは持っている。
- ・ あと、戦略10で、これまで行政単位で行ってきたことを役割分担して行おうということも考えている。役所の言葉で書いている部分もあるので、もう少し分かりやすくする必要がある。
- ・ 大石委員の意見では日本全体の中での関西、黒田先生の意見では独自の関西という感じだったと思うが、そのあたりで意見をいただきたい。(近畿地方整備局)
- ・ 国土形成計画法に沿って計画を作り、国民の利害が国で閉じている以上、日

本の中で関西がどうするかという意識が必要ということを申し上げたかった。

- ・ アメリカのハイウェイと公共交通の整備に関する法律（SAFETEA-LU）では、強いアメリカに貢献できない地域はなくすという発想である。アメリカは今も経済成長を果たしているのに、我が国はほとんど経済成長していない。我が国の経済成長に近畿はどう貢献するのかという視点が必要。関西は関西だけでやっていくという時代は終わっている。単位はやはり国であり、近畿を議論しようと思えば、近畿の地図だけでは議論できない。
- ・ 東アジアとの関係で九州とどう違うのか。アジアのゲートウェイについては九州でも言っている。関西は九州とどう違い、どういう役割を持とうとしているのかという意志が必要である。港湾や空港などについて、東アジアの状況を把握し、どういう関係にするのかを考えないといけない。
- ・ 中国地方、四国地方は、関西に人材を供給してくれている。それらの地域とどういう関係を持つのか、また中京圏との関係をどうするのか、このあたりも議論していくべき。
- ・ 司法制度審議会の中で、我が国は事前調整の国から事後調整の国に代わると言っている。ヨーロッパなど多民族の地域では事後調整しかできないが、日本が和の精神のもと事前調整ができる。場を尊ぶなど和の精神をグローバル化の中で簡単に捨てて良いのかといったことを言えるのは、関西しかないと思う。そうにはならないと思うが、日本が日本でなくなってしまうことは避けるべき。（大石先生）
- ・ 関西は東京におねだりする自治体になったと言われている。東京がこうだから関西もこうだというような発想はやめるべきである。ただ、日本の中の関西という意識を持つことはその通りだと思う。（黒田先生）
- ・ 九州と近畿はどう違うのか。どうやったら近畿独自のメリットが出せるか。（近畿地方整備局）
- ・ 九州は東京に顔を向けておらず、東アジアの一部という発想である。九州独立国でいくという発想について、地理的な関係でいけばその戦略は間違っていないかもしれない。関西では、数で勝負するのではなく、ビジネスモデルを付加することが必要。関西の港湾、沿岸空間を新たなビジネスモデルとして生まれ変わらせるために、グローバルネットワークの中でどのような付加価値をつけていくかが、近畿独自のビジネスモデルのポイントとなる。（黒田先生）
- ・ 国の中間とりまとめでは、広域圏の自立ということも含まれている。関西におけるビジネスモデルで競争優位性をつけることは重要である。
- ・ 戦略 10 については、個々の自治体のしがらみがあり、ロックインの状況の象徴である。

- ・ 関心があるのは、戦略3の産業についてである。数行で多くの重要なことが詰め込まれているが、ここでもロックインされたものが見え隠れする。これからは産業だけの問題ではなく、教育の仕組みとどう連動させるか、人材についてやり直しの仕組みとどうつなげるかなどもセットにして考えるべきである。地域の中でどうイノベティブな仕組みが作れるかがポイントである。産業活動に大学院が組み込まれ生産活動の中で学位が取得できるということも一般的になっているし、戦略5でもアジアの人が日本の最先端や暗黙知などを学ぶことも可能と思う。現在は縦割りの戦略になっているが、産業と教育の連携など新しい組み合わせ、モデルも検討して欲しい。
- ・ 戦略10については、役割分担だけでなく、どのように連携を促進するかも重要である。コラボレーションにより、個々の都市では出せなかった力を発揮することができ、ロックインされた状況を、従来とは違うモデルで打破することが重要である。(加藤先生)
- ・ 前回の学識者会議で、戦略10について、役割分担だけでなく、リーダーシップを誰がとるのかという議論になった。(近畿地方整備局)
- ・ 道州制の議論をどう芽吹かせるかがポイント。各府県の計画のホッチキスでは終わらないようにして欲しい。
- ・ 誰がリーダーシップをとるかについては、きちんと議論した方が良い。(黒田先生)
- ・ 近畿のブロック計画が国土計画の一部を担う計画に位置づけられるべきで、そのためには国民が分かるような共通の言葉でまとめなければならない。
- ・ 関西は1つ1つのままではいけない。ブロック計画をまとめる際には1つになるべきである。方法論としては、エビデンスの提示と、評価指標できちんと説明できることが必要。
- ・ 「日本の中のもうひとつの中心」「個性を活かした」という表現は生理的に受け付けない。「個性を活かした」は禁句にすべきで、個性を隠れ蓑にしない方が良い。
- ・ 関西は何かを考える上で、細やかさは1つのキーワードになる。文化的にもそうであるが、ビジネスにおいて、九州との差別化や日本・世界にも通じる細やかさとは何か。中国とISOを巡って標準化競争をしているが、関西は標準化には弱い。ビジネスモデルとしてオープンソース戦略がキーワードになると思う。関西はもともとのづくりについて、ファインチューニング、つまりあるものを1から作っていった訳ではなく、あるものにアイデアを入れて改良して作っていった。関西には、文化の多様性、学術的な要素があり、関西の方向性のヒントになるのではと思う。
- ・ これまでは実験的な都市政策が良いとされていたが、21世紀は起業的都市政策がパラダイムになると言われている。そのためには市民が勉強して起業家

となる仕掛けを作っていく必要がある。これとオープンソース戦略がリンクされたものが関西の目指す姿になると思う。例えば「勉強するまち関西」というような、より前に進んでいるという姿が見えるようなスローガンが必要である。(小林先生)

- ・ 確かに細やかな文化は関西らしいと思う。細やかな文化で思うことは、ある種の折り合い、調整の仕方である。妥協するのではなく、お互い出し合った上で新たな価値を作っていくということが関西らしい気がする。
 - ・ 多様性を示す1個1個について、リアリティのある言葉、データで説明することが必要。例えば滋賀県が一番最後まで人口が伸びる地域とされている。そういったことをきちんと出すと、関西の現状を把握できる。
 - ・ 関西はバラバラではいけないというが、どの単位で考えるべきか。1つは流域で、これは環境単位である。もう1つはコミュニティ単位で、身近な活動圏での意志決定の仕組みが必要となる。これらの単位は、今の行政単位を維持したままでも議論できる問題と思う。それらが連携を実現する手がかりにならないかと思う。
 - ・ ものさしの多様化、評価の問題がある。全てを市場、経済価値に置き換えて相対化しようという動きがあるが、違うものさしによる評価方法を関西で作る、発信することもできると思う。それらは例えばビジネスモデルの評価や景観の評価などで、これらを概念ではなく、マーケットとして作ることが重要である。(小浦先生)
-
- ・ 目指す姿と戦略が分かりにくい、その整理の仕方について、目指す姿の前に、まず関西独自の財産、ポテンシャルを整理すると分かりやすくなる。
 - ・ 関西のポテンシャルの1つは独自の伝統・文化、もう1つは民の力である。民の力を生かす1つとしてNPOなど人の力があり、例えば「研究・教育と実務を兼ね備えた日本の防災拠点」は、産・官・学の連携が重要になると思う。あともう1つは、関西は首都圏にはない共和国であるということである。魅力を持った都市がいかに連携するか。確かに仲は良くないかもしれないが、同じ関西人ということで何かがあったときには1つにまとまるという連帯感はある。
 - ・ アジアとの関係などについていえば、奈良時代の交流の中で生まれた人・モノのつながりなど九州と違う独自の関係を通じて関西のポテンシャルを整理すると、分かりにくかった戦略と目指す姿も整理しやすくなると思う。(音田先生)
-
- ・ Web社会、オープンソース、情報知識の生産する仕組みがワンウェイ型から双方向型に移行など、大きな社会潮流がはっきり出ていない。
 - ・ 世界の変化に対してどう関西が対応するかという視点が必要。国の全体計画の中で考えられているかもしれないが、社会潮流の整理が必要と思う。(加藤

先生)

- ・ 議論以前の問題だが、戦略について1つの文章がワンセンテンスになっていて長い。読んでいる間に分からなくなるので、議論を明確にするために、何が問題点で、それに対してどうするのかという説得力のある文章にすべき。
- ・ 力という言葉が氾濫するのは力がないからということになる。同様に元気という表現は元気がないからということで薬屋の広告みたいになる。もっと細やかな表現の方が良い。
- ・ Web社会になると、Web内の情報をどう精度の高いものにしていくかということが重要になり、これも細やかさと合う。細やかな思想を持つNPO同士の連携など、関西の土壌で形成されてきた。
- ・ 九州というアジアはどちらかと言えば韓国、関西では上海というイメージになる。歴史をもう少しさかのぼると、海のシルクロードではインド、陸のシルクロードではローマになる。シルクロード外交は関西に伝統的な長い土壌があり、その方法を活用すべきである。海外諸国と文化的なネットワークを作り、その上で政治や経済のネットワークを重ねていくことが関西らしいと思う。九州との違いを明確にして、アジアとの関係を書いていくべきである。
- ・ 関西らしい言葉を入れ、あとは文章力をもって分かりやすくして欲しい。(千田先生)

- ・ 情報の発信力だけでなく受信力も落ちている。受信力の低下は同じ圏域内の情報についても同様である。多様性は情報が流れないと発揮できない。人、モノ、金、情報などの中で、一番流れにくいのは知識や情報である。
- ・ 例えば、限界集落の問題についても、各地でいろいろな試みをやっているが、なかなか情報が流れていない。頑張っている人は多くいるが、どうすれば良いか分からない。情報の発信力と受信力を徹底的に高める必要がある。(小林先生)

- ・ 戦略について、文章が抽象的で、縦割りである。琵琶湖や熊野など具体的な地名や固有名詞を出したらどうか。議論を進める上ではその方が良い。(小浦先生)

- ・ 以前は、コウノトリ、豊岡などの表現があったと思うが。(近畿地方整備局)
- ・ コウノトリは固有的でしかもグローバルな取組である。このようなものは出していった方が良い。(小浦先生)
- ・ 近畿の中山間地域は他と違うという話であったが、それを指標で表す際、人口の年齢構成、大都市地域との近接性を示す指標などが考えられるが、どのような指標が良いか教えて欲しい。(近畿地方整備局)

- ・ 同じ近畿でも地域によって状況は違う。知っている地域は但馬であるが、比較的豊かな地域でそれを持続したいと考えられている。山が深くなく、都市に行きやすく、子供もすぐに戻って来られる。しかし伝統的な家族という形態が壊れていることが大きなリスクである。家族のあり方が変わってきており、家族のタイプによる格差も生じている。コミュニティがないとやっていけず、将来への明るい展望がもてない家族がいる。但し、これも場所によって異なる。（小林先生）